

夕顔卷の光源氏

—『白氏文集』諷諭詩をめぐる—

A character of Hikaru Genji in the Yugao chapter

博士後期課程 日本文学専攻 二〇〇五年度入学

太 田 陽 介

Ota Yosuke

【論文要旨】

本稿は『源氏物語』夕顔卷における源氏と夕顔の恋に注目し、そこに描かれている光源氏像について、『白氏文集』諷諭詩を基に読み取っていく。源氏と夕顔の恋は現実の身分や秩序から解放された一個の男女の関係として捉えられるが、二人の間に理解や共感が果たされていたとは考えられず、この恋は源氏の独善的な性格が強いといえる。そして源氏が夕顔に溺れ、なにがしの院で怪異に遭うという物語には源氏の「をこ」としての姿が読み取れる。本稿ではこうした源氏の姿を抑えつつ、源氏の矛盾や自家撞着した姿を「古塚狐」「和古社」「不致仕」「凶宅詩」という『白氏文集』諷諭詩を媒介として浮き彫りにする。特に「凶宅詩」

は、従来表現のレベルにおける指摘はあったものの、詩の内容までを物語に読み込んだ研究は少なかった。そこで本稿は詩の持つ主題や諷諭を解釈に採用することにより、源氏がなにがしの院の怪異の原因をどう捉えているかという点について考察した。「凶宅詩」は凶事の原因に「宅凶」を想定することを批判しているが、源氏は怪異の原因に、なにがしの院の「宅凶」を想定している。このような点をふまえて、源氏の「をこ」としての姿を読み取っていく。

【キーワード】 をこ、源氏と夕顔の心境の乖離、「古塚狐」、「不致仕」、
「凶宅詩」

はじめに

夕顔卷には、

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

の歌をはじめとする和歌の解釈の問題、夕顔をとり殺した物の怪の正体の問題⁽²⁾、またこの問題とも関わってくるが、夕顔卷との影響関係が認められる先行作品・説話・話型をどのように把握するかという問題⁽³⁾、さらには夕顔の遊女性・巫女性についてなど、実にさまざまな問題があるが、本稿は特に源氏と夕顔の関係について着目し、そこに描かれている光源氏像について考察する。源氏と夕顔の関係については、秋山虔氏が

「かれ（＝源氏、筆者注）がその身分地位から脱出して、男女の純なる交わりを確保し」たといひ、また木村正中氏はこうした関係を「純愛」という語で評した。本稿も大枠としてはこうした理解に基づくが、たとえこの恋が社会的制約から解き放たれた一個の男女による純粋な恋であったとしても、鈴木日出男氏が言う「魂の交感」や相互理解は本当に存在していたと言えるのだろうか。こうした見方に対し、今井源衛氏、渡辺久寿氏、竹原崇雄氏、日向一雅氏らは、物語に現れる「隔て」の語（竹原氏）や両者の「心の懸隔」（渡辺氏）に着目する論を発表した。こうした見方は、夕顔物語の主題が「身分的懸隔の絶望」や「零落した女の嘆きや苦しみ」を語ることにあり、空蟬を含め、源氏は「彼女たちの人生の悲しみや絶望の深みはついに理解し得なかった」という日向氏の近年の論に集約されることになろう。また日向氏は、夕顔巻で源氏が夕顔の内面を捉えきれずにいたことについて、源氏を「をこ」化する語りが夕顔巻には存在したと指摘している。

本稿は前掲の諸氏の論考に負うところが大きい。論を進めるにあたって、源氏が夕顔の内面を把握できていないこと、そして源氏自身の矛盾などを「をこ」という観点で抑えていく。特にこの恋は、源氏による独善的性格が強いように思う。そうした源氏の姿を読むためには、『白氏文集』の諷諭詩が有効であろうと思われる。夕顔巻の『白氏文集』は古注釈以来いくつか指摘されてきたが、それらの指摘はプロットの一致、あるいは表現の問題として済まされることが多かった感がある。また漢籍との関わりで、近年における重要な指摘は、新聞一美氏による唐代伝奇『任氏伝』や白居易『任氏怨歌行』（『白氏文集』未収録、散逸）

の影響であろう。氏の指摘から、これらが夕顔巻のプロット、また夕顔の人物造型に影響を与えたことは確かなのだろうか、氏もことわっているように、これらの作品を『源氏物語』が直接に受容したという証拠はない。本稿が『白氏文集』にこだわる理由は、実際の受容を重視するからでもある。本稿では、古注釈に指摘された夕顔巻の『白氏文集』諷諭詩を中心に、表現のレベルに留まることなく、詩の主題・諷諭を解釈に採用することによって浮き彫りにされる源氏の矛盾や自家撞着した姿を読み取ることにしたい。

なお、『源氏物語』本文の引用は新編日本古典文学全集本に拠り、『白氏文集』本文の引用は詩ごとに引用元を記した。また詩番号は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』所収の「綜合作品表」に拠った。

一

夕顔巻は、夕顔がながしの院での怪異によって死ぬところにクライマックスがあり、それによって怪奇譚としての性格が強調されるのであるが、そうした性格を形成する要素の一つに妖狐譚がある。これについては新聞氏が指摘した『任氏伝』の影響を考えてよいと思われるが、本稿では改めて『白氏文集』の「狐」の詩に注目してみたいと思う。

源氏は夕顔の女に次第に溺れてゆき、「なほ誰となくて二条院に迎へてん」（①一五四頁）と思うようにまでなる。そして夕顔と次のようなやりとりをする。

「いざ、いと心やすき所にて、のどかに聞こえん」など語らひたま

へば、「なほあやしう。かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ」といと若びて言へば、げにとほは笑まされたまひて、「げに、いづれか狐なるらん。ただはかられたまへかし」と、なつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。(①一五四—一五五頁)

傍線を付した源氏の発言「いづれか狐なるらん」について、『紫明抄』⁽¹⁵⁾は「古塚狐」(0109)を指摘している。

以下に「古塚狐」を引用して、その内容を確認しておく。

古塚狐 誠艶色也 (古塚狐 艶色を誡めたり)

古塚有狐妖且老 (古塚に狐有り 妖にして且た老いたり)

化爲婦人顔色好 (化して婦人と爲りて顔色好し)

頭變雲鬢面變粧 (頭は雲鬢に變じ 面は粧を變ず)

大尾曳作長紅裳 (大尾、曳きて長 紅の裳を作せり)

徐々行傍荒村路 (徐々^{ぞろぞろ}に行て荒村の路に傍^{そば}ふ)

日欲没時人靜處 (日の没りなんと欲する時、人靜かなる處)

或歌或舞或悲啼 (或は歌ひ、或は舞ひ、或ときは非啼す)

翠眉不舉花顏低 (翠眉^{すいび}、舉^{もたげ}ずして花の顏低^{たひ}れり)

忽然一笑千萬態 (忽然に一たび笑みて千萬の態^{さま}あり)

見者十人八九迷 (見る者十人、八九は迷ひぬ)

假色迷人猶若是 (假の色の人を迷はすも猶是のごとし)

眞色迷人應過此 (眞の色の人を迷はすこと此に過ぎたる應^べし)

彼眞此假俱迷人 (彼は眞、此は假れり、俱に人を迷はす)

人心惡假貴重眞 (人の心假れるを惡んで眞を貴重しぬ)

狐假女妖害猶淺 (狐の女妖を假れる、害、猶淺し)

一朝一夕迷人眼 (一朝一夕に、人の眼を迷はす)

女爲狐媚害則深 (女の狐の媚を爲す、害深し)

日長月長潮人心 (日に長じ、月に長じて人の心を溺らす)

何況褒妲之色善蠱惑 (何に況や褒妲之色、善く蠱惑するに)

能喪人家覆人國 (能く人の家を喪し、人の國を覆へす)

君看爲害淺深間 (君看よ、害を爲す、淺深の間)

豈將假色同眞色 (豈に假色を將て眞色に同じくせんや)⁽¹⁶⁾

「古塚狐」は、自注に「誠艶色也」とあって、美女に対する批判をはきりと打ち出し、本文でそれが顕著に現れているのは傍線を付した「假色迷人猶若是 眞色迷人應過此」と「豈將假色同眞色」である。『白氏文集』中に狐を題材としている、あるいは狐が詠まれる詩は「古塚狐」以外にも、卷一「凶宅詩」、卷二「和答詩十首」のうち「和古社」、「有木詩八首」、卷十一「哭王質夫」などがある。「凶宅詩」については後に論じるが、ここでは「和古社」(0109)に注目したい。⁽¹⁷⁾「和古社」は以下のような詩である。

和古社 (古社に和す)

廢村多年樹 (廢村多年の樹)

生在古社隈 (生じて古社の隈に在り)

爲作妖狐窟 (為に妖狐の窟と作り)

心空身未摧 (心空しきも身は未だ摧けず)

妖狐變美女 (妖狐美女に變じ)

社樹成樓臺 (社樹は樓臺と成る)

黄昏行人過 (黄昏に行人過ぎ)

見者心徘徊 (見る者心徘徊す)

飢鷗竟不捉 (飢鷗も竟に捉えず)

老犬反爲媒 (老犬反つて媒を為す)

歲媚少年客 (歲ごとに媚ふ少年の客)

十去九不迴 (十去つて九は迴らず)

昨夜雲雨合 (昨夜雲雨合し)

烈風驅迅雷 (烈風迅雷を驅り)

風拔樹根出 (風抜いて樹根出で)

雷響社壇開 (雷響いて社壇開く)

飛電化爲火 (飛電化して火と爲り)

妖狐燒作灰 (妖狐燒けて灰と作る)

天明至其所 (天明けて其所に至れば)

清曠無氛埃 (清曠にして氛埃無し)

舊地葺村落 (舊地村落を葺き)

新田闢荒萊 (新田荒萊を闢く)

始知天降火 (始めて知る天の火降す)

不必常爲災 (必ずしも常に災と爲らざるを)

勿謂神默默 (謂ふ勿れ神默默たりと)

勿謂天恢恢 (謂ふ勿れ天恢恢たると)

勿喜犬不捕 (喜ぶ勿れ犬の捕えざるを)

勿誇鷗不猜 (誇る勿れ鷗の猜はざるを)

寄言狐媚者 (言を狐媚する者に寄す)

天火有時來 (天火時有りて來ると)

この詩にも狐の美女に化ける怪が詠まれている。だがこちらの詩には「黄昏」という言葉があり、源氏と夕顔が邂逅した夕暮時や、源氏の詠んだ歌

寄りてこそそれかとも見めたそかれにはのぼの見つる花の夕顔

(①一四一頁)

との影響関係を認めることもできるが、ここでもやはり「和古社」の諷諭に注目したい。「和古社」も末句の「寄言狐媚者 天火有時來」によって人間の女に警告を発している。また「古塚狐」と比較した場合、「和古社」にだけ見えているものは、狐が雷に打たれて死ぬということである。

「古塚狐」「和古社」に見られるように、白居易の諷諭の方法は、狐を引き合いに出すことにより、人間の美女の害を説くことであった。つまり両詩によれば、美女は狐よりもたちが悪いという。特に「古塚狐」の説くところによれば、「能喪人家覆人國」とあるように、美女の害は甚大である。事実、夕顔に溺れている源氏は

内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこに尋ぬらんと思しやりて、かつはあやしみの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しいことわりなり： (①一六三頁)

と、参内もせず、また六条御息所に気兼ねしながらも夕顔との恋に耽溺しているのである。

しかし夕顔に耽溺するということが、夕顔の境遇や心境を理解することにはならない。前の引用部で見たように、源氏は夕顔を「心やすき所」へと誘うが、夕顔は拒否する。夕顔の語るところによれば、彼女には「恐れ」があったはずだが、そうした心境を源氏は全く汲み取らず、「いづれか狐なるらん、ただはかられたまへかし」と、ただ自分に付いてくれば良いのだ、という強引な態度を見せる。そして夕顔に対する無理解によってながしの院へと連れ出し、結果それによって夕顔を失う姿は「をこ」であるといっても過言ではない。そして源氏は夕顔の媚態に溺れているが、そこに「古塚狐」「和古社」に説かれている諷諭を讀み込むことで、源氏の「をこ」としての姿が浮き彫りにされるのである。

また夕顔巻には萩原広道が『源氏物語評釈』で指摘した「変化の脉」^{すぢ}に代表されるような不吉な伏線が張り巡らされており、それらはながしの院での怪異、そして夕顔の死へと収斂していくのであるが、「古塚狐」や「和古社」の諷諭も、夕顔の死をより確実なものとする一要素なのである。

二

明け方も近うなりにけり。鶏の声などは聞こえて、御岳精進にやあらん、ただ翁びたる声に額づくぞ聞こゆる。起居のけはひたへがたげに行ふ、いとあはれに、^①朝の露にことならぬ世を、何をむさばる身の祈りにかと聞きたまふ。南無当来導師とぞ拜むなる。「かれ聞きたまへ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがりたまひて、

優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな

^②長生殿の古き例はゆゆしくて、翼をかはさむとはひきかへて、弥勒の世をかねたまふ。行く先の御頼めいとこちたし。

前の世の契り知らるる身のうさに行く末かねて頼みがたさよかやうの筋なども、さるは、心もとなかめり。

(①一五八—一五九頁)

夕顔の宿での明け方、源氏は宿の周囲の気配に耳を傾ける。その中で源氏は御岳精進を行う翁の声を聞き、夕顔に来世にまで続く契りを約束するのである。

古注釈のうち、『紫明抄』は傍線①について「朝露負名利 夕陽憂子孫」の句を持つ「不致仕」(0079)を指摘する。また傍線②は「長恨歌」(0066)の「七月七日長生殿 夜半無人私語時 在天願作比翼鳥 在地願爲連理枝」¹⁹⁾の句を想起させる表現である。

まず「不致仕」について考えたい。同詩を確認しておこう。

不致仕（致仕せず）

七十而致仕（七十にして致仕するは）

禮法有明文（禮法に明文有り）

何乃貪榮者（何ぞ乃ち榮を貪る者）

斯言如不聞（斯の言を聞ざるが如くする）

可怜八九十（怜むべし八九十）

齒墮雙眸昏（齒は墮ち雙眸は昏するに）

朝露貪名利（朝露に名利を貪り）

夕陽憂子孫（夕陽に子孫を憂う）

挂冠顧翠綵（冠を挂けんとして翠綵を顧み）

懸車惜朱輪（車を懸けんとして朱輪を惜しむ）

金章腰不勝（金章に腰勝はず）

僂僕入君門（僂僕して君門に入る）

誰不愛富貴（誰か富貴を愛せざる）

誰不戀君恩（誰か君恩を戀せざる）

年高須請老（年高けては須らく老を請うべし）

名遂合退身（名を遂げては合に身退くべし）

少時共嗤語（少時は共に嗤語するも）

晚歲多因循（晚歲多くは因循す）

賢哉漢二疏（賢なる哉漢の二疏）

彼獨是何人（彼獨り是れ何人ぞ）

寂寞東門路（寂寞たり東門の路）

無人繼去塵（人の去塵を繼ぐ無し）

このように、「不致仕」は冒頭に「七十而致仕 禮法有明文 何乃貪

榮者 斯言如不聞」とあり、七十歳を過ぎても引退しない貪吏を辛辣に

批判した詩である。この冒頭の注釈をしておく、「禮法有明文」とは、

『礼記』『曲礼上』（十三経注疏本）に「大夫七十致事」、同箇所の鄭玄注

に「致其所掌之事於君而告老」とあり、これらに拠つたものと思われる。

傍線①の源氏の発言は、御岳精進する翁と「不致仕」の貪吏を重ね合

わせた上でのものである。「朝の露にことならぬ世」とは、「不致仕」の

他にも『漢書』李廣蘇建伝第二十四に「人生如朝露」とある。また『文

選』（胡刻本）には卷二十九「古詩十九首」の一首に「年命如朝露」と

あるのをはじめとして数例が見出せる。

ここで少し「露」について触れておきたい。「露」は源氏が夕顔を回

想するにあたって「夕顔」とともに現れる語である。末摘花巻の冒頭で

は、「思へどもなはあかさざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思

し忘れず：」（①二六五頁）と、源氏は「露」とともに夕顔を回想する。

これには夕顔自身が歌に「露」を詠んでいることが関係していると思わ

れ、「露」は夕顔巻冒頭の和歌

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花（①一六〇頁）

や、帚木巻で頭中將の語つた常夏の女の歌

山がつの垣は荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露

（①八二頁）

うち払ふ袖も露けき常夏にあらし吹きそふ秋も来にけり

(①八三頁)

にも詠まれていた。そして夕顔が「露」の語を用いることは、夕顔の「はかなさ」を仄めかしているとも解される。

しかし源氏は、人生を「露」と見て取るという、いわば達観した心境にあるにもかかわらず、それとは相反する行動を夕顔に対して取るのである。「何をむさぼる身の祈りにか」とあるように、源氏の心中には翁への批判的な思いがあることは事実であるが、一方で翁が「南無当来導師」と拜むのを契機に、源氏は来世までの関係を夕顔に約束させる歌を詠むのである。⁽²¹⁾翁の拜む「当来導師」とは、五十六億七千万年後に生まれ、衆生を救うとされる弥勒菩薩のことである。源氏の和歌にある「優婆塞」は翁を指すのであろう。したがって、源氏は来世の名利を祈る翁を批判的に思っている一方で、夕顔との来世にまで続く関係を願っていることになる。これは「朝の露」とは矛盾した態度である。

前掲の引用部より少し前でも、源氏は夕顔に対して「この世のみならぬ契り」(①一五七頁)を約束している。二重傍線部で語り手が「こちたし」と評するように、源氏が「弥勒の世」という大げさな時間を引き合いにしてまで、夕顔との関係を確固たるものにしようとするのは、「かくうらなくたゆめて這ひ隠れなば、いづこをはかりとか我も尋ねん、かりそめの隠れ処」(①一五三―一五四頁)と、夕顔がどこか自分の手の届かないところへ行ってしまうのではないかという不安を抱いていたためであるが、実際、その不安は夕顔の死によって現実のものとな

ってしまうのである。したがってここで源氏の言う「来む世も深き契りたがふな」は恋人同士の甘美な言葉とはなりえず、現世における関係を断ち切る方向に物語を作用させるといえよう。するとこの草子地の主体である語り手を、物語の結末を知る立場であると位置づけるならば、語り手はまるで源氏を嘲笑するかのような冷酷な視点で物語を見つめるとともに、行く末を頼む源氏を「をこ」的存在にまで貶めるのである。

次に、傍線②は、源氏が「長恨歌」を意識していることを示す表現である。源氏が夕顔と契るに際して「長恨歌」を避ける理由は、やはり「長恨歌」に描かれる「女の死」を忌み嫌ったためと理解されるが、土方洋一氏が言うように、夕顔物語を桐壺巻の物語の反復であると捉えれば、源氏が「長恨歌」を避けたのは、深層心理において父帝と母の関係を想起したためであり、本能が「長恨歌」を忌避させたのだと解釈できる。あるいは父帝の母への感溺ぶりを、源氏は人を介して聞かされたものかもしれない。⁽²³⁾さらに土方氏の言を借りれば、氏は「宮廷の秩序に反してまでも一人の更衣を愛しぬこうとした父帝の血が源氏にも流れていることを読者に印象づけることになる」というが、夕顔も「下の品の女」の文脈によって物語に召還され、源氏との恋は明らかに身分違いの恋であり、その点は源氏も把握している。夕顔が頭中将の北の方の家である右大臣家から、後妻打ちを暗示する「いと恐ろしきこと」(①一八五頁)を言われた原因は夕顔の身分が低かったためであり、さらに兎ままで設けたためであった。これは桐壺更衣の境遇と類似していると言える。源氏と夕顔の関係を桐壺帝と桐壺更衣の関係と重なるということでは、しぜん「長恨歌」を引きつけることになり、夕顔物語はある部分で

長恨の主題を受け継ぐものであると捉えられるのである。

三

いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲がくれて、明けゆく空いとをかし。はしたなきほどにならぬさきにと、例の急ぎ出でたまひて、軽らかにうち乗せたまへれば、右近そ乗りぬる。そのわたり近きながらの院におはしまし着きて、預かり召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。「まだかやうなることをならはざりつるを、心づくしなることにもありけるかな。」

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬしののめの道

ならひたまへりや」とのたまふ。女恥ぢらひて、

「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ

心細く」とて、もの恐ろしうすこげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひの心ならひならんとをかしく思す。

(①一五九—一六〇頁)

この箇所には古注以来『白氏文集』の指摘はなく、影響は認められな
いと考えるが、源氏と夕顔の関係を考えるにあたって、この場面での和
歌の贈答は無視できないと思われるので、簡単に述べることにする。夕

顔の詠んだ「山の端の」の歌は、通説では夕顔の死の予感が込められた
歌であるとされている。新全集はじめ現行の諸注は「山の端」を源氏、
「月」を夕顔自身の喩であるとす。しかしこの歌が引用箇所冒頭の
「いさよふ月に…」と対応しているのならば、「月」と「山の端」の喩の
対象は逆になるのではないか。²⁴夕顔は源氏によってながしの院へと連
れ出されようとしている。この状況が「いさよふ月にゆくりなくあくが
れん」である。すると「いさよふ月」は源氏の喩であると解される。に
もかかわらず「山の端の」の歌では、月が夕顔自身の喩になってしま
うとは考えられない。よってこの歌の解釈を簡潔に記すと、「私の気持ち
も知らずにいるあなたは、ふと気が変わって消えてしまわないでし
ょうか」となる。いずれにしろ夕顔が自己の存在の不安さを詠んだ歌である
ことには変わりはないが、「いさよふ月…」と対応していると考えれば
このような解釈になるだろう。少なくとも、夕顔にとって月は情趣的な
景物ではなかった。夕顔は月と源氏を同一視し、「いさよふ」月は自ら
をながしの院という異界へと、そして死へといざなうものと捉えてい
るのである。

源氏の「いにしへも」の歌についても少し考えてみると、この歌は何
か典拠がありそうな、非常に思わせぶりの歌であるが、やはりここは暗
に頭中將のことを言っており、夕顔が頭中將の語った常夏の女ではない
かと、それとなくさぐりを入れていたのだから考えたい。それに対して夕
顔は「山の端の」の歌で答えたが、この答歌は、贈歌のことば・表現を
全く取り入れていない。日向一雅氏は「この贈答歌は両者のくい違いを
鮮やかに示しているのではあるまいか」と言うが、²⁵実際そのとおりなの

であろう。そして「山の端の」の歌に続く語り手の地の文に「女恥ぢらひて」とあるが、これは夕顔の心情に即していない可能性が考えられる。夕顔の「山の端の」の歌を挟んで、前の「恥ぢらひて」と後の「もの恐ろしうすこげ」が、夕顔の心理状況として一貫していないからである。さらに源氏は「山の端の」の歌を詠み、「もの恐ろしうすこげ」にしている夕顔の様子を「かのさし集ひたる住まひの心ならひ」によるものと判断し「をかし」と思っている。このように、ここでも源氏は夕顔の恐れ・不安を汲み取っていない。やはりこの贈答は、両者の心境の乖離を如実に表しているのである。

四

夕顔とともにながしの院へと移った源氏は、そこで一晚を過ごす。少し寝入ったころ、枕上に「いとをかしげなる女」の姿をした物の怪が現れる。既に引用した箇所と重複するが、物の怪出現の直前から物の怪の発言までを確認しておく。

内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこに尋ねらんと思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさし向かひをあはれと思すまゝに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげ

なる女ゐて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思はさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。(①一六三—一六四頁)

物の怪出現の直前、源氏が六条御息所を回想していることは、やはり物の怪の正体を御息所の生霊に比定するための一つの手がかりである。しかしこれまで諸氏によってこの物の怪の正体が論じられてきたが、結局のところ不明であるとしか言いようがないのである。その原因は、夕顔巻にはさまざまな伝説・説話・話型が錯綜していることにある。そうした中で土方洋一氏は、この物の怪の正体は「プレテクスト群の中からその存在が影のように浮かび上がってくるような仕組⁽²⁶⁾」であるという。この物の怪については、氏のような理解の仕方が妥当であり、いわば物の怪の正体決定は読者に委ねられているのだと言えよう。ただ、ひとまず本稿では、源氏による六条御息所の回想と物の怪の発言を重視し、物の怪の正体に六条御息所が関わることを前提として論を進めていくことにする。

この物の怪の突然の登場によって、夕顔は絶命する。源氏は物の怪に對抗するべく、手際よく右近やながしの院の宿守たちに指示を与えるが、その間に次のように思っている。

夜半も過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは、まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれ

にやとおぼゆ。(①一六八頁)

『紫明抄』はこの場面に「凶宅詩」(0004)を指摘している。まず『紫明抄』の注記を確認しておく。

梟鳴松桂枝、狐蔵蘭菊叢、蒼苔黄葉地、日暮多旋風凶宅詩

傍線で示したように、「梟」はもちろんのこと、「松」「風」の語句が一致することから、この場面は「凶宅詩」からの引用と見て間違いないであろう。新全集「漢籍・史書・仏典引用一覧」はこれらの語句の符合を認めながらも「確実な典拠とできるかどうかは、なお検討の余地がある」とし、典拠とすることに消極的な態度を取っている。また丸山キヨ子氏は、『源氏物語』の諷諭詩の扱い方について

諷諭の詩の寓する教訓性こそ踏襲されてゐないものの、その一部を踏まへることによつて、その句を中心にその詩一篇のもつ感動的な場面のイメージなり、情趣なりを彷彿として描き出させ、原詩のもつ場面、事柄に類似する光景または構成などを、効果的に印象づけるやう、試みたものがある⁽²⁷⁾

とし、その一例として夕顔巻の「凶宅詩」を挙げてゐる。確かに「凶宅詩」に現れる景物が、なにがしの院に漂う怪しい雰囲気を強調する効果を果たしていると言えよう。「梟」は他に蓬生巻、浮舟巻に現れ、蓬生

巻では

もとより荒れたりし宮の内、いと狐の住み処になりて、疎ましく
け遠き木立に、梟の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうの
ものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬ物ども所を得
て、やうやう形をあらはし…(②三二七頁)

と、傍線で示したように、ここでも「凶宅詩」に現れる「狐」「梟」によつて荒廃した末摘花邸の様子が描かれる。

また「夜半も過ぎにけんかし…」の箇所における「凶宅詩」引用については、他に新聞一美氏⁽²⁸⁾、藤原克己氏⁽²⁹⁾も論じている。両氏は、夕顔巻冒頭の

いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり。

(①一三六頁)

に注目する。そして新聞氏は「凶宅詩」などに詠まれている「大邸宅を貴重視しないという精神は、光源氏が夕顔の宿に入っていくためには前提となるものであった⁽³⁰⁾」という。

「いづこかさして…」の箇所には『源氏釈』以来、『古今和歌集』巻一

世中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞやとさだむる

『新編国歌大観』九八七

が、また『河海抄』には『古今六帖』第六の

なにせんにたまのうてなも八重むぐらいつらんなかにふたりこそね
め(『新編国歌大観』三八七四)

が引歌として指摘されている。「凶宅詩」のほか、これらの引歌もふまえた上で、やはり豪華な邸宅に執着しないことが、源氏が夕顔の宿に立ち入るための条件であったと考えてよいのだろう。

繰り返すが「凶宅詩」に描かれる景物がながしの院の描写に用いられていることから、「凶宅詩」はながしの院の怪異を演出する表現上の効果を發揮していると考えてよい。こうした理解に留めれば諷諭詩の教訓性は認められないが、新間氏・藤原氏は夕顔と源氏の出会いの条件として「凶宅詩」などの精神を読み取った。だがもう少し読みを深め、また射程を広げることにより、解釈の中に「凶宅詩」の諷諭を採用することはできないだろうか。つまり、ながしの院の怪異を「凶宅詩」の諷諭に基づいて捉えることでどのような解釈が可能となり、またどのような光源氏が浮かび上がってくるであろうか。深読みを懼れず、この点について以下に考察を加えてみたい。

ここで改めて「凶宅詩」を確認しておく。

凶宅詩

長安多大宅 (長安に大宅多し)

列在街西東 (列って街の西東に在り)

往往朱門内 (往往にして朱門の内)

房廊相對空 (房廊相對して空し)

梟鳴松桂枝 (梟は松桂の枝に鳴き)

狐藏蘭菊叢 (狐は蘭菊の叢に藏る)

蒼苔黃葉地 (蒼苔黃葉の地)

日暮多旋風 (日暮れて旋風多し)

前主爲將相 (前主は將相爲れども)

得罪竇巴庸 (罪を得て巴庸に竇たる)

後主爲公卿 (後主は公卿爲れども)

寢疾歿其中 (疾に寢て其中に歿す)

連延四五主 (連延として四五の主)

殃禍繼相鍾 (殃禍繼いで相鍾る)

自從十年來 (十年自從り來)

不利主人翁 (主人の翁に利あらず)

風雨壞簷隙 (風雨簷隙を壞り)

蛇鼠穿牆墻 (蛇鼠穿牆を穿つ)

人疑不敢買 (人疑ひて敢て買わず)

日毀土木功 (日に土木の功を毀る)

嗟嗟俗人心 (嗟嗟俗人の心)

甚矣其愚蒙 (甚しきかな其の愚蒙なる)

但恐災將至 (但災ひの將に至らんとするを恐れ)

不思禍所從（禍の從る所を思はず）

我今題此詩（我今此詩に題して）

欲悟迷者智（迷者の智を悟らせんと欲す）

凡爲大官人（凡そ大官と爲る人）

年祿多高崇（年祿多くは高く崇し）

權重持難久（權重くして持つこと久しくし難し）

位高勢易窮（位高くして勢窮り易し）

驕者物之盈（驕る者は物の盈なり）

老者數之終（老は數の終りなり）

四者如寇盜（四者寇盜の如く）

日夜來相攻（日夜來りて相攻む）

假使居吉土（假使吉土に居るとも）

孰能保其躬（孰か能く其の躬を保たん）

因小以明大（小に因りて以て大を明かにし）

借家可論邦（家を借りて邦に論ふべし）

周秦宅房函（周秦房函に宅り）

其宅非不同（其宅同じからざるに非ず）

一興八百年（一は興りて八百年）

一死望夷宮（一は望夷宮に死す）

寄語家與國（語を寄す家と國と）

人凶非宅凶（人凶にして宅凶に非ず）

こう。

長安の數ある大邸宅の中に、住人のいない家がある。訳を聞くと、その家には代々高位高官の人が住んでいたが、みな災禍に見舞われ、それによって誰もこの家には住まなくなったという。ああどうして人は災いを恐れてばかりで、災いの原因を考えないのか（嗟俗人心 甚矣其愚蒙 但恐災將至 不思禍所從）。周と秦は同じ地に都を置いたけれども、一方は八百年続き、もう一方は短命に終わった。凶の原因は人であって、土地にあるのではない（寄語家與國 人凶非宅凶）。

以上見たとおり、「凶宅詩」は災禍の原因を家のせいにする人間の愚かさを批判的に詠んだ詩である。

前に引用した部分をもう一度確認したい。

夜半も過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおぼゆ。（①一六八頁）

長い詩であるので、論点を明確にするために内容を簡潔にまとめてお

まず、源氏が「気色ある鳥」の声を聞いてから、「梟はこれにや」と思っていることに注意したい。この発言を考えると、源氏は梟を見たこともなく、また鳴き声も聞いたことはないであろうが、名前くらいは知っていたようである。そして源氏がこの鳥を梟だと推測した理由は、や

はり「凶宅詩」に詠まれている景物に拠ると考えられる。「梟」は『倭名類聚抄』によると

梟 説文云梟（割注略）食父母不孝鳥也 爾雅注云鴟梟者分別大小之也

とあって、「不孝鳥」、つまり悪鳥であることが知られる。そのためか和歌に詠まれることはほとんどなく、平安時代の用例はごく僅かである。³²よってここはやはり、源氏は「凶宅詩」に詠まれている景物から鳥の声を「梟」と連想した可能性が高いと言え、それはつまり源氏が「凶宅詩」を受容していたことの証でもある。

そして梟の声を聞いた直後、源氏は次のように思っている。

うち思ひめぐらすに、こなたかなたけ遠く疎ましきに人声はせず、
などてかくはかなき宿は取りつるぞと、くやしきもやらん方なし

①一六八—一六九頁

これによると源氏は、このなにかしの院に宿ったことがこの事態の原因であったと感じているらしい。つまり源氏はなにかしの院の「宅凶」を想定しているのである。源氏は「凶宅詩」を知っていたはずだが、こうした態度こそは、「凶宅詩」において「愚蒙」とされた態度ではなかったか。「凶宅詩」の諷諭をふまえてこの部分を読んだとき、そこには源氏の矛盾が現れる。

また源氏は次のように思う。

からうじて鶏の声はるかに聞こゆるに、命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり、忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、よからぬ童への口ずさびになるべきなめり、ありありて、をこがましき名をとるべきかな、と思しめぐらす。①一六九—一七〇頁

源氏はこの事態の原因が、自分の「おほけなくあるまじき心の報い」、つまり、藤壺への思慕にあると考えている。だが既に見たように、物の怪登場の直前、源氏が六条御息所を回想していることは重視されるべきである。源氏は物の怪の発言を考えた場合に最も想起しやすいはずの六条御息所について、全く意に介していないのである。しかしこの事態を藤壺への思慕の報いと考え、源氏は「人凶」を意識していると見えるが、これが源氏にとっての最終的な結論ではないようである。

夕顔の四十九日の供養も果て、なにかしの院の怪異の後、にわかにか発症した病も癒えたころ、源氏は夕顔の死因を次のように結論付けている。

君は夢をだに見ばやと思しわたるに、この法事したまひてまたの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、荒れたりし所に棲みけんもの我に見入れけん

たよりに、かくなりぬることと思し出づるにも、ゆゆしくなん。

(①一九四頁)

これによれば、源氏は夕顔の死因について「なにがしの院の物の怪が、自分に取り憑いたついでに夕顔をとり殺したのだ」と解していることになり、「などてかくはかなき宿は取りつるぞ」よりはいささか「人凶」を意識していると言えるかもしれない。しかし、やはりここでも源氏は六条御息所を意識してはいないのである。夕顔巻における六条御息所は、その人がはつきりと登場するわけではないが、夕顔巻の始発が「六条わたりの御忍び歩きのころ」と語り出され、また源氏によって随所で夕顔と対比される存在である。そういった意味で、源氏には「いとことなることなき人をときめか」したことが「人凶」となり、六条御息所の生霊が夕顔をとり殺したという可能性は十分に考えられるはずである。そして源氏自身も夕顔のような女に夢中となったあげく、なにがしの院で物の怪に襲われるという事態が人に知れわたり、「をこがましき名」を立てられることを恐れていたのであった。結果的に「眞への口ずさび」になるような事態は起こらず、惟光らの処置によって「をこ」としての源氏像はうまく隠蔽されたといつてよい。しかし諷諭詩を介して源氏を見据えたとき、物語には「をこ」としての源氏のはつきりと現れるのである。

おわりに

以上、本稿では夕顔巻の源氏について、『白氏文集』諷諭詩に基づい

て読み、源氏の抱える矛盾や自家撞着した姿を浮き彫りにしてきた。それによってこの恋が源氏の独善的な側面が強いことの一端を示せたと思う。はじめに述べたことでもあるが、源氏と夕顔の恋は、双方が現実の身分や秩序から離れたところで成立し、またそれを前提としなければ成立しない恋だったのであろう。しかし、そこに共感が果たされていたのかどうかは、やはり疑問と言わざるを得ないだろう。よく指摘されることではあるが、夕顔巻には夕顔の発言や、夕顔の心理に沿った描写が少ない。しかし、それは彼女の自我が希薄であったと言うことではなく、ただ物語が語っていないだけであらう。夕顔が行った意思表示の一つに、名乗りを拒否したことがある。源氏の「今だに名のりしたまへ」という求めに対し、夕顔は「海人の子なれば」と言い、ついに自身の素性を明かさなかった(①一六二頁)。夕顔が名乗りを拒否したのは、源氏との恋が互いの現実を離れたところで成立していて、それが現実社会の秩序で捉えなおされたときには、しぜん消滅するしかないということを感じていたためではなかったか。夕顔が源氏に靡いた側面も確かにあったのだろうが、夕顔の内心には源氏へのあきらめ、絶望がたえず存在しており、夕顔にはこの奇妙な関係の破局が見えていたのだろう。しかし源氏はそうした夕顔の心理に、ついに触れることはできなかったのである。

夕顔巻はそれ自体短編的な物語であるが、本稿でも少し触れた桐壺巻との関係や、また玉鬘の存在など、長編的な可能性も秘めている。本論は夕顔巻の光源氏について述べてきたが、この光源氏十七才の秋の恋物語が、あとに続く物語にどのような影を落としたのか、別稿を期して本

稿を終わりたい。

注

(1) 「心あてに」の和歌をめぐっては黒須重彦氏が『夕顔という女』(笠間書院 一九七五年 増補版 一九八七年)などで頭中将誤認説を主張して以来、さまざまに議論されてきたが、現在では誤認説は否定される傾向にあり、藤井貞和氏「三輪山神話式語りの方法―夕顔巻」(『源氏物語論』岩波書店 二〇〇〇年)の提示した「挨拶の歌」とする解釈が概ね承認されている。また近年清水婦久子氏は「光源氏と夕顔」(『源氏物語の風景と和歌』和泉書院 一九九七年)において、夕顔巻の和歌を、和歌文法に則って解釈した論を発表している。

(2) 物の怪の正体をめぐっては

① 六条御息所とする説

② なにかしの院の妖物とする説

③ ①・②の折衷説

の三説が存在し、現在でもなおその正体に関しては不明と言わざるを得ない。この問題については中島あや子「なにかし院の怪」(『源氏物語講座』三 勉誠社 一九九二年)がこれら諸説を整理する。また近年では前田敬子「『紫式部集』絵をめぐる歌群と『源氏物語』夕顔の巻」(『国語国文学』三十六号 福井大学国語国文学会 一九九七年三月)、三谷邦明「物の怪―源氏物語と紫式部集との絆―夕顔巻と紫式部集との新たな関係構造を求めてあるいは現実体験の間テクスト性」(『南波浩編『紫式部の方法』笠間書院 二〇〇二年)など、『紫式部集』所収歌である

(詞書略)

なきひとにかことはかけてわづらふもおのがこころのおにやはあらぬ(『新編国歌大観』)

に見られる、紫式部の物の怪観との関係から正体を把握しようとする論も発されている。

(3) 夕顔巻との影響関係が認められる先行作品・説話・話型には、『伊勢物語』第六段、妖狐譚、河原院説話、三輪山伝説などが挙げられる。これら

について具体的な論の紹介は避けるが、高橋亨「夕顔の巻の表現―テクスト・語り・構造」(『物語文芸の表現史』名古屋大学出版会 一九八七年)はこれらを総合的に論じ、『源氏物語』が、それ以前のさまざまなレベルにある前テクストを過剰なまでに引用し、その変換と重層によって、みずからの作品の主題的世界を生成している」ことを検証する。

(4) 円地文子は夕顔の「無意識な娼婦性」を指摘(『源氏物語私見』新潮社 一九七四年)し、秋山虔「源氏物語の女性たち」(小学館 一九八七年)もこれを評価する。原岡文子「遊女・巫女・夕顔」(『源氏物語 両義の糸』有精堂 一九九一年)はこれに巫女という観点を取り入れ、三輪山型神婚譚などとの関わりから夕顔の聖性について論じる。

(5) 『源氏物語』岩波新書 一九六八年

(6) 「夕顔」『国文学』一一巻六号 学燈社 一九六六年

(7) 「夕顔物語の主題」『源氏物語虚構論』東京大学出版会 二〇〇三年 別稿に「『かくろへごと』の世界―光源氏論(2)」秋山虔ほか編『講座源氏物語の世界』第一集 有斐閣 一九八〇年

(8) 「夕顔の性格」『源氏物語の思念』笠間書院 一九八七年

(9) 「夕顔巻における好色性と純粋性について―矛盾点・問題点の再検討を通して―」『日本文芸論集』七 山梨英和短期大学日本文学会 一九八〇年三月

(10) 「『夕顔』の巻における美的世界の創造―隔て―」の意識の解明」寺本直彦編『源氏物語とその受容』右文書院 一九八四年

(11) 「夕顔巻の方法―視点を軸として―」『國語と國文學』六三巻九号 一九八六年九月

(12) 「『帚木』三帖の主題と方法」『源氏物語の準拠と話型』至文堂 一九九九年

(13) 注(11) 日向論文。源氏の「をこ」性については注(9) 渡辺論文にも指摘がある。

(14) 「もうひとりの夕顔」『源氏物語と白居易の文学』和泉書院 二〇〇三年

(15) 玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』角川書店 一九六八年 以下、『紫明抄』『河海抄』の引用は同書に拠る。

(16) 「古塚狐」本文・訓説は、太田次男 小林芳規『神田本白氏文集の研究』

(17) (勉誠社 一九八二年) に拠り、若干改変した。

(17) 注 (14) 新聞論文、古賀典子「夕顔巻の『夕顔』『狐』『梟』—表現素材から見る玉鬘系後期成立」(『むらさき』三八巻 二〇〇一年) が既に指摘する。古賀氏は「和古社」が「最も近い典拠ではないか」と言うが、プロットの類似を指摘するに留まり、詩の持つ批判的意味あいまでは解釈に取り入れていない。

(18) 「和古社」本文は平岡武夫『白氏文集歌詩索引』(同朋社 一九八九年) 下冊所収の陽明文庫蔵那波本に拠り若干改め、訓読は佐久節『白楽天全詩集』(『統国訳漢文大成』本の復刻 日本図書センター 一九七八年) を参考にした。

(19) 「長恨歌」本文は金沢文庫本『白氏文集』(大東急記念文庫 一九八三年) に拠った。

(20) 「不致仕」本文・訓読は注 (18) 前掲書に拠り、本文は若干改変した。

(21) こうした態度について注 (9) 渡辺論文は「彼の周囲をとりまくあらゆるものが、たとえそれがよぼよぼの翁の念仏であろうと彼の愛の遂行のために奉仕させられるのである」という。

(22) 「夕顔の女と物語の生成」『物語史の解析学』風間書房 二〇〇四年、他に村井利彦「帚木三帖仮象論・第二稿」(『山手国文論攷』三 一九八一年三月)、小島雪子「夕顔との恋—光源氏の人間像に関する考察—」(『芸芸研究』(東北大学) 一〇八号 一九八五年一月)、上野辰義「夕顔と紫のゆかりの物語」(『京都語文』一一号 二〇〇四年一月) などともこの点について触れる。

(23) 注 (22) 小島論文に既に指摘されている。

(24) 注 (1) 清水論文に既に指摘されている。

(25) 注 (11) 日向論文

(26) 注 (22) 土方論文

(27) 「諷諭詩その他の影響関係について」『源氏物語と白氏文集』東京女子大学学学会 一九六四年

(28) 「源氏物語と白居易の諷諭詩—白居易の諷諭詩と夕顔・六条御息所—」注 (14) 前掲書

(29) 「日本文学史における『白氏文集』と『源氏物語』」『菅原道真と平安朝

漢文学』東京大学出版会 二〇〇一年

(30) 注 (28) 論文

(31) 「凶宅詩」本文・訓読は注 (18) 前掲書に拠った。

(32) 一例を挙げると、『山家集』(『新編国歌大観』) に

山ふかみけちかきとりのおとはせて物おそろしきふくろふのこゑ

(一一三〇三)

とある。また、「梟はこれにや」という本文を、河内本は「おそろしき山に鳴らむふくろふはこれなりけり」とする。「山」「おそろしき」「梟」の語の一致から、『山家集』と河内本には何か共通の典拠が存在する可能性がある。